

ぼくもこせいがあゝる人間だ

小 三

人は、みんなそれぞれちがったこせいがあります。ぼくもそうです。ぼくは生まれたときから右足が小さく、ひざの下のきん肉も少なく足の長さもちがっています。こせいやとくちょうをもった一人です。

ぼくが生まれたクリニツクでは、生まれてすぐに足のことに気づいたのですが、お母さんにそのことを話さず、四日後にはじめて足について話しました。しんだんは右足形せいふぜんでした。でも、これも本当の名前ではないそうで、

「太ももから足のじょうたいがふつうの人とちがう子はけっこういます。ひざから下がふつうの人とちがうつていう子どもは世界で一人です。」とお医者さんに言われたそうです。それを聞いて、お父さんもお母さんもうしたらしいのか分からずに、ぼくの足をかくす生活をしていたそうです。みんなにぼくの足のことを言い出せず、世界に一人と言われたぼくを見て、「なんでみんなと同じじゃないのだろう」という思いをしたと思います。そのクリニツクではそんなとくちょうをもつた子どもははじめてで、話をするのをためらっていたと言います。ぼくはそれを聞いて、少し悲しい気持ちになりました。「ぼくはかくされなくちやい

けない子なのかな、足が小さいっておかしいのかな」と思いました。それから、「このままではぼくにとってもお母さんたちにとってもいけない」とお母さんは思ったそうです。そこで、ぼくとお母さんは四ししようがいのある子どもの集まりにさんかしました。そのとき、手や足がない子たちにかこまれたぼくは、

「あなたは足があって、幸せね。」と言われました。そのとき、ぼくはどきどきとしました。たしかに足がある。手や足のない子たちがどうどうと生活していることにお母さんはないていました。ぼくは、生まれもった自分の右足のこせいをすきになれました。「自身んをもつていいんだ」と思うように

なりました。ちよつと人とちがうから、へんだなと思う人がいても一人一人みんなちがうし、それはこせいなんだと思います。お母さんは、ようち園の先生から、

「足にとくちようがあつて生まれたけれど、人とちがうところがある子は人のいたみが分かるやさしい子になるよ。」

と言われたそうです。ぼくも本当にそう思います。自分自身がこせいできだからこそ、生まれつきこせいをもつて生まれた人などを見てもふつうにせつすることができるとし、その人を大切にすることができると思います。全ての人にやさしくなれます。

「みんなちがつてみんないい」とい

う言葉があります。一人一人ちがうのが当たり前なんだと思います。ほくも自分の足はすてきなこせいだと思って、かくさずにどうと生活していきたいです。これから出会う、とくちようのあるたくさんの人たちを大切に、やさしくせっしていききたいと思えます。